

# すすんで聴く子どもの育成をめざして

- 「自ら表現する喜び」をはぐくむ学習活動 -

音楽科研究会議

研修員 内田 薫（川崎市立西有馬小学校） 牛尼 富子（川崎市立白山小学校）  
松田 研一（川崎市立橘中学校） 川崎 靖弘（川崎市立南生田中学校）

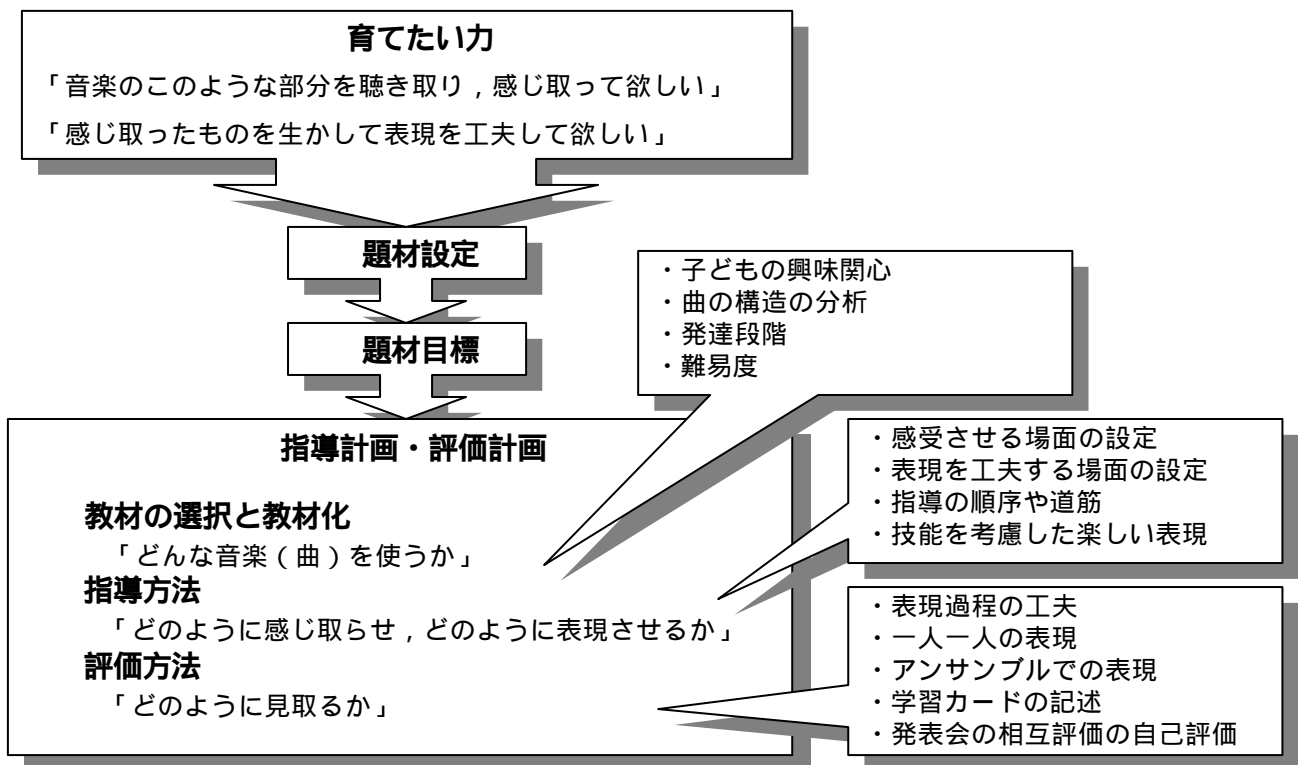
研修指導主事 吉田 和江

## 主題設定の理由

平成 13 年度の総合教育センター音楽科研究会議では、すすんで聴く子どもの育成をめざすために、音楽の構造的側面と感性的側面をかかわらせるねらいをもった創造的な学習活動が、どのように音楽的感受の能力とかかわるかについて検証した。この研究で得た、音楽的な感受の能力の見取りに有効なプロセスや方法と「授業に生かす 5 分間の即興表現アプローチ」を授業に取り入れる中で、子どもたちには、音を集中して「聴く」姿勢が身に付いてきた。

本研究会議では、音楽科の評価の観点の一つでもある、「音楽的な感受と表現の工夫」に視点を置き、創造的な学習活動ばかりでなく、様々な表現活動を進める中で自ら表現する喜びをはぐくむ学習活動を探りながら、すすんで聴く子どもの育成を図りたいと考えた。

聴くことは表現の出発点とも言われる。聴くことによって子どもたちの感性は揺り動かされ、音楽そのものの美しさやすばらしさに気付き、表現したい思いや願いがわき起こってくるとも言える。そこで、子どもたちが音楽の基礎的能力を身に付け、音楽を味わい自ら表現する喜びをもつ楽しい音楽経験を積み重ねるために、題材や指導計画の過程を次のように考え検証した。



## 研究の内容

### 検証事例1 小学校1学年 「いおと さがして」

- 1 題材目標 ・音や響きの違いに気付き音の出し方を工夫して、音に関心をもつようにする。
- 2 学習活動の工夫

小学校1学年で「すすんで聴く」ことができるというのは、どんな音でありどんな様子だろうかと考えて出発した。この学年では、聴き取る音が具体的なもの、明確なものでなければならない。そこで、音そのものを聴き取ることから取り組むこととした。  
この題材では、身近な楽器や音素材に関心を持ち、イメージを広げながら即興的に音を探して表現する感性や、いろいろな楽器の音に気を付けて聴く能力を育てたいと考え、いろいろな音や楽器とどのように出会わせるかを考えて取り組んだ。

#### 第3時の展開

目標 楽器の音色や響きに気を付けて聴き、音の出し方や身体表現を工夫している。

1. 「音のマーチ」に楽器を入れて歌う。

2. 音に合わせて身体表現をする。

クラベス シンバル 大太鼓 小太鼓  
トライアングル すず

音のイメージに合った身体表現を工夫している。  
(音楽的な感受や表現の工夫)

3. 音でお話をし、いろいろな音を見付ける。

4. 見つけた音を発表し合い、聴き合う。

楽器の音色や響きに気を付けて、音の出し方を工夫したり聴いたりしている。  
(音楽的な感受や表現の工夫)

#### 児童の様子と考察

楽器の音を全身で受け止めることができる児童が多いため、聴き取った音を体全体で表現することにした。大きい音・小さい音、瞬間的な音・余韻のある音、恐ろしい音・かわいい音など、感じた通りに体で表現していた。子どもたちのそれぞれの表現を認めることで、思い思いの表現をして楽しんでいる様子が見られた。

この活動の中で、音のおもしろさを感じ、音をしっかりとらえている様子とともに、音色に興味をもち、イメージを膨らませている姿を見取ることができた。また、同じ楽器でも奏法を変え、子どもたちの予想と違う音を出すことで、子どもたちは1つの楽器がいろいろな音を出すことに気付き、奏法と音色に自然に興味をもつ様子が見えた。この活動により、次の学習活動の「楽器のいろいろな音見つけ」につなげていくことができた。

### 検証事例2 小学校1学年 「みんなであわせて」

- 1 題材目標 ・友達と合わせてリズムののって演奏する楽しさを味わう。  
・楽器の音色や響きを感じ取りながら、聴いたり演奏したりする

#### 2 学習活動の工夫

約1年にわたり「すすんで聴く子どもの育成」に取り組んできた結果、1学年なりに「聴く」ことができるようになっていく姿を見取ることができた。それは、合奏での楽器のバランスや鉄琴、打楽器の微妙なずれも指摘し合うことができるようになったことから分かる。  
この題材で初めて、クラス全体で取り組む合奏を経験し、みんなで楽器を合わせることの楽しさを知り、楽器の音色の変化による曲想の変化まで感じ取ることができた。本時では、いろいろな楽器の音色や響きに気を付けて聴き、様子を想像しながら聴く感性を育てたいと考えた。そこで、自分たちが合奏した楽器の音から興味をつなげて鑑賞の学習に取り組んだ。

#### 第7時の展開

目標 楽器の音色や響きに気を付けて聴き、楽曲の気分を感じ取っている。

1. 「こいぬのマーチ」を合奏する。

2. 「そりすべり」を聴く。

- ・どんな楽器の音が聞こえてくるか気を付けて聴く。
- ・どんな動物が出てくるか考えて聴く。
- ・むちの音がどれか気を付けて聴く。
- ・すずの音と馬のいななきに気を付けて聴く。
- ・すずの音、むちの音、馬のいななきなどから様子を想像して聴く。

楽器の音色や響きに気を付けて聴き、楽曲の気分を感じ取っている。(鑑賞の能力)

#### 児童の様子と考察

この題材の合奏「こいぬのマーチ」で経験した「すず」の音はすぐに聴き取ることができるのではないかと考え、鑑賞曲として「そりすべり」を選んだ。

その結果、慣れ親しんだすずの音にはすぐに反応し興味をもち、さらに、馬のいななきの音やむちの音にも気付けて楽しく聴くことができた。1学年の子どもたちが楽しく想像を膨らませて聴くことができる曲として「そりすべり」は有効な曲であった。また、教師の提示したそりすべりの絵も子どもたちの想像を助ける支援になった。

関心をもって聴くことができたためか、この曲の特徴を早くつかみ、次時には、曲に合わせて身体表現をしたり鈴やウッドブロック、むちの音を重ねたりして自由に楽しんで聴くことができ、子どもたちの大好きな曲になった。

### 検証事例3 小学校5学年 「きれいな響きを味わおう」

1 題材目標 ・ 様々な形態の合唱や合奏に関心を持ち、その美しさを味わう。

2 学習活動の工夫

声の重なりを響きを味わって聴く感性を育てていくことにより、子ども自身が歌いながら、自分の声と友達の声がきれいに響き合っていることを感じ取ることができれば、合唱への意欲が膨らみ、自ら表現を工夫していこうとする心情はぐくまれるものと考えられる。

この題材では、声を注意深く聴くための手だてとして、授業の最初に、発声練習とともに「わらべうた」（ここでは「ほたるこい」）の分担唱や輪唱を短時間取り入れることにした。また、合唱教材「星の世界」では、和声的な合唱の響きとその変化を感じ取らせたいと考え、子どもが声の重なりを聴くことに集中できるように対旋律である中声部や低音部のリズムを、動きの少ない形にアレンジした。

#### 第4時の展開

目標 音の重なりを感じ取って歌う。

1. 「おなかの体操」で発声練習をする。

2. 「ほたるこい」で交互唱や輪唱をする。

1小節（4拍）ごとの分担唱

A ほ ・ ほ ・

B ほ たるこい・

A あっちのみ ずは

B に がいぞ ・

2拍ずつの分担唱

A ほ ・ B ほ ・

A ほ たる B こい・

A あっちの B み ずは

A に がい B ぞ

3. 「星の世界」の対旋律を合唱し、  
お互いに聴き合う。

重なり合う声の響きを感じ取って  
歌っている。  
(音楽的な感受や表現の工夫)

4. 対旋律の響きのうえに旋律を  
のせて三部合唱をする。

5. 今日の学習を振り返る。

#### 児童の様子と考察

分担唱の最初では、歌い出すタイミングがうまくつかめなかったようで、自信のなさからか声が小さくなった。数回繰り返して相手の声を聴き、拍の流れにのると、適度の緊張感をもちながら楽しく歌い継いでいた。また、輪唱の時には自然に身体を揺すり始め、「拍」を取る姿が見られた。

分担唱では、よく聴き合い、拍の流れにのらないと、スムーズに歌うことは難しい。そのため、注意深く友達の声を聴くことになり、クラス全体の声が揃ってきた。これは、聴き、感じ取ったことが表現に生かされており、合唱をする上で有効であったと考える。輪唱で「拍」を取る姿は、他のパートを意識し、聴き始めた姿としてとらえた。振り返りカードに「つられないように耳をふさいで歌ったが、他の音を聴きながら歌った方が歌いやすい。」と書いた子どももあり、声の重なりを楽しむことができた。

#### 児童の様子と考察

リズムを簡単にしたため、子ども自身の力でパート練習を行うことができ、短時間で音が取れるようになった。後半、交代で聴き合う場面を設定したが、どの子ども自分たちの合唱を客観的に聴いてみたいという思いをもち、多くの子どもがパートのバランスについて気づき発言していた。

このように、授業のねらいに応じて教材を工夫して与えることは大切である。簡単に声を重ね合えるよう教材を工夫したことにより、「聴く」ことに意識をもっていくことができ、自分たちの合唱の響きに気づき、よりきれいな響きに関心をもつことができた。

## 検証事例4 中学校1学年 「ボディパーカッションを楽しもう」

- 1 題材目標
- ・身体全体を使ってリズムを表現する楽しさを味わう。
  - ・パートの役割を生かしてリズムを創作し、表現を工夫する。

### 2 学習活動の工夫

この題材では、音楽の最も基本的な要素であるリズムや拍に焦点を当て、リズムや拍をよく聴き、感受しながら表現する能力を育てることをねらいとした。日頃の授業で少しずつ行ってきたリズム即興を導入としてボディパーカッションの創作を行うことで、生徒が音楽表現の難しい技能から開放され、のびのびと表現できる場面を設定した。その学習活動の中で他のパートのリズムや拍を聴き合い、強弱や音色を工夫して、楽しんで表現することに視点を置いて取り組んだ。

### 3 学習活動と考察

	学 習 活 動	生 徒 の 様 子
第1時	<p>ボディパーカッションに興味をもち、親しむ</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○4つのパートに分かれてそれぞれのリズムをとらえる。</li> <li>○4つのパートを合わせ、リズムを重ねる。</li> <li>○ユニゾンリズムやエンディングのリズムをとらえて共通アンサンプルの部分を演奏する。</li> <li>○グループに分かれて演奏する。</li> <li>○VTRでボディパーカッションの発表を見る。</li> </ul>	<p>生徒にとっては初めての活動であったが、リズム即興などの活動を少しずつ授業の導入で行っていたため、抵抗なく活動に入っていくことができた。また、4つのリズムを重ねていくと、生徒は拍を感受して、お互いのリズムを合わせるためによく聴き合うようになった。</p> <p>また、他の学校の生徒のボディパーカッションの発表をVTRで観ることにより、興味・関心が高まったことが学習カードから見取ることができた。</p>
第2時	<p>音色や強弱を感じ取り、表現を工夫する</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○VTRで表現の工夫が生かされているボディパーカッションを鑑賞する。</li> <li>○グループに分かれて共通アンサンプル部分の音色や強弱を変化させ表現を工夫する。</li> <li>○グループごとに発表し、相互の演奏を聴き合う。</li> <li>○他のグループの演奏や自分のグループの演奏についての感想や評価をプリントにまとめる。</li> </ul>	<p>グループで創作を行う部分では身体表現（振り付け）にこだわり、音から離れて動きが中心になってしまう生徒も見られた。しかし、最終的には拍を聴き、感じ取らなければ合わせられないことに気付き、身体の動きとリズムのかかわりを感じ取りながら表現した生徒の姿を見取ることができた。8小節の短い創作表現だったが、2つのリズムを絡み合わせた発表も見られた。</p>
第3時	<p>音色や強弱を感じ取り、表現を工夫する</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○各グループに分かれて共通アンサンプル部分の音色や強弱を変化させ表現を工夫する。また、中間発表の反省を生かし更に即興部分の表現の工夫を行う。</li> <li>○グループごとに発表し、相互の演奏を聴き合う。</li> <li>○他のグループの演奏や自分のグループの演奏についての感想や評価をプリントにまとめる。</li> </ul>	<p>グループごとに叩く場所を変え音色に変化を工夫する活動では、補足リズム的に強拍に足踏みを入れるグループが多かった。叩くと強い音や弱い音が重なったりし、各リズムパターンのリズムの絡みを生かした表現の工夫するまでには至らなかった。しかし、学習カードの感想や評価では、自由に表現できた喜びや楽しく表現できた感想が数多く記入されていた。</p>

#### 考 察

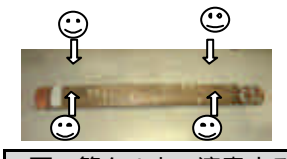

リズムや拍という音楽の最も基本的な要素に焦点を当てることにより、他の表現の技能から開放され、のびのびと表現している様子を見取ることができ、1学年のこの時期に行う題材としてはタイムリーであったと考える。この学習活動により、子どもたちが拍をよく聴き、合わせることや、リズムの重なりを面白さを感じ、のびのびと表現する喜びを得ている様子を見取ることができた。しかし、3時間という短い時間では、叩く場所を変え、音色の重なりを工夫して表現するところまでには至らなかった。再度、学年を追って年間計画の中に位置付け、伸ばせなかった部分を伸ばしていく必要がある。また、2人組みでリズム創作を行ったグループアンサンプルにおける表現の工夫の見取りは大変難しく、更に表現の工夫を見取る手立てを考慮する必要がある。創作活動をする時間をもっと多く取り入れ、発表を3時間目の最後にまとめることで、生徒一人一人の活動観察や自己評価などから、より多くの見取りが可能になったことも考えられる。創作活動への導入やリズム、拍の感受については、日頃の授業で少しずつ行っていた即興活動が良い影響を与えていたと考える。

## 検証事例 5 中学校 2 学年 「日本音楽に親しもう」

- 1 題材目標
- ・音楽の構造や日本音楽の特徴をとらえ、鑑賞する。
  - ・箏を演奏し、その音色や雰囲気味わう。
  - ・日本的な雰囲気のある曲を作る。
- 2 学習活動の工夫

「すすんで聴く」には、音楽の本質・構造を理解していることが大切であると考え、グループで共に創作し合奏する中で、自分の音や相手の音を聴き合う姿勢が育つのではないかと考えた。  
 普段耳にすることの少ない日本音楽を自然に聴き取り、和楽器の音色や日本の伝統的な音楽への興味関心を高めるためには、全員が和楽器の演奏を体験することが大切であると考え、一面の箏を四人で演奏するための調弦の工夫とともに創作を取り入れることとした。

### 3 学習の流れと考察

	学習活動	教材化の工夫	生徒の様子
第1時	<p>箏の奏法を知り、演奏に親しむ。                      箏の演奏を聴く。[六段の調序段]                      箏の奏法を知る。(爪を使用、押し手、引き色を「六段の調」の中で知る)                      箏1, 2, 3, 4の4つのパートに分かれ、それぞれの旋律を演奏する。                      4つのパートを合わせ、演奏する。</p>	 <p>一面の箏を4人で演奏する</p>	<p>微妙な奏法による表現の違いや、押し手引き色などの音色の違いを知ることにより、それらの表現を生かした演奏をする生徒が多く見られた。</p> <p>また、交代制にせず、全員で同時に演奏できるように調弦と教材を工夫したため、意欲をもって取り組む様が見られた。</p>
第2時	<p>「春の海」の中間部分を作る。                      旋律と伴奏の役割を説明する。                      春の海の中間部分を創作する。                      いくつかのグループの創作を発表する。                      創作したことをプリントに記入する。</p>	 <p>B A</p> <p>B B B A</p> <p>「春の海」の教材化</p>	<p>グループによる創作活動を通して、自分の音や他パートの音を聴く姿勢が見えた。また、活動途中で、創作の様子を他のグループに紹介することは、創作意欲を刺激する効果があった。中間発表を聴くことで、自分たちの創作と比較することができ、共感し批評しながら集中して聴いていた。</p> <p>教師が一方向的に指導するのではなく生徒同士で刺激を受けながら学び合う場面設定したことで、その後の学びが積極的になったことにつながっていた。</p>
第3時	<p>創作を完成させ、発表する。                      前時のグループに分かれ、創作を完成させる。                      グループごとに発表し、お互いの演奏を聴き合う。                      工夫した点や他のグループの演奏で気付いたことをプリントにまとめる。</p>	<p>創作の教材化                      箏1・4...旋律の創作                      箏2・3...伴奏の創作                      各パート使用する弦を決めて1小節分の創作をする。それを4回繰り返す。旋律は、箏1と4が1小節ずつ交互に演奏する。</p>	<p>鑑賞曲を実際に演奏し創作することで、音楽の構造を理解し日本音楽に自ら関心をもって聴いていた。それは、曲の構成やテンポの変化、尺八と箏のかかわり合いなどを深く聴く生徒が多かったことから分かる。</p>
第4時	<p>春の海、六段の調を鑑賞する。                      西洋音楽と日本音楽の違いについて考える。                      「春の海」「六段の調」を聴き、感じたイメージや、日本音楽の特徴をプリントにまとめる。</p>		

#### 考察

すすんで聴く生徒を育成するには、経験、知識、そして音楽の本質に触れることが大切ではないかと考える。教師のねらいを事前に知識として与えること、よく音を聴かなければ課題に取り組めないことなど、教材の与え方を工夫することによって、能動的に音や音楽を聴こうとする姿が見られた。また、他の生徒の演奏を聴くことで刺激を受けたり生徒同士で教え合ったりする場面を設定することは日本音楽への関心を高めるためにも大変効果的であった。「何をどのように聴かせたいか」というねらいのある教材を与えていくことにより、子どもたちに関心をもって「聴く」姿勢が生まれ、日本の伝統音楽を受け入れる素地ができていくのではないかと考える。

今回課題として残ったことは、イメージを膨らませて聴くということであった。創作を初めて扱ったせいか、作ることに意識が集中し、イメージを考えてからの創作にならなかった。従って、鑑賞時に情景を思い浮かべて聴くということに関しては十分とは言えなかった。今後は、表現活動の実践を通し、イメージを膨らませて表現できる生徒を育てたいと考える。

## 研究のまとめ

本研究会議では、子どもに学ばせたい内容を設定し学習活動の中に教師が仕掛けていくために、題材と向き合い教材を選択し、さらに、曲の構造分析をして教材化を図った。

その成果として、教師の仕掛けた課題となる部分を聴き取り、知覚し感受している子どもたちの様子は、児童生徒の発達段階に応じた「歌唱」「器楽」「鑑賞」の様々な音楽活動を検討し検証する中で、子どもが音や音楽に耳を傾け聴く姿や、聴き取ったことを生かしながら自らすすんで表現する姿として見取ることができた。

また、指導の筋道は、鑑賞から表現に至る方向や表現から鑑賞に至る方向で進めたが、いずれの方向であっても、関連付けることが効果的であることが分かり、改めて表現と鑑賞の関連の重要性が明らかになった。

さらに、小アンサンブルなどの形態を取り入れた表現過程や発表の中での活動観察において評価の観点を絞り込むことにより、音楽的な感受の能力や一人一人の表現の工夫の観点の評価は見取りやすくなることが分かった。一人一人が何を感じ取り、どのような思いで表現しようと思ったのか等、時間内では表出しにくく見取りにくかった点についても、各学習過程の学習カードや評価カードの自己評価や相互評価を追うことにより読み取ることができた。さらに、教師が観察しきれなかった微妙な動きや表情、子どもの言葉の未発達な段階での見取りの不十分な場面については、子どもの活動の様子をVTRで録画し見返すことにより見取ることができた。

子どもが自ら表現する喜びを味わいはぐくむ学習活動を進めるためには、真剣に音楽と向き合う教師が、子どもたちに身に付けさせたい力を明確に意識して題材を設定し、その学習内容を意図的に組み立てていくことがきわめて大切である。しかし、一人では大変困難な作業でもあり、課題でもある。本研究会議のように、小学校・中学校の校種を越えた教師同士で、子どもの発達段階による子どもの様子や音楽の専門的見地から検討し合える場が有効であり、今後もこの課題を乗り越えるべく、教師間の連携をもって題材や教材の検討等の研究を進めたい。

最後に、研究を進めるに当たり適切なお助言をいただきました先生方、研究にご支援、ご助言をくださいました研修員所属学校の校長先生、教職員の皆様に、心より感謝し厚く御礼申し上げます。

### 【参考文献】

清水和『音と遊ぼう楽しい授業づくり』東洋館出版社	1992年
坪能由紀子『音楽づくりのアイデア』音楽之友社	1995年
『小学校学習指導要領解説 - 音楽編 - 』文部省	1999年
『中学校学習指導要領解説 - 音楽編 - 』文部省	1999年
山田俊之『ボディパーカッション入門』音楽之友社	2000年
金本正武『小学校音楽科基礎・基本と学習指導の実際』東洋館出版社	2002年

### 【指導助言者】

高知大学教授	坪能由紀子
川崎市立小学校音楽教育研究会長（川崎市立東大島小学校長）	小林 洋一
川崎市立中学校教育研究会音楽科部会長（川崎市立向丘中学校長）	操 雅子
箏演奏家	門倉 映子
川崎市教育委員会学校教育部指導主事	伊藤 民子